

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：82623

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20329

研究課題名（和文）環境感受性の個人差を踏まえた自然体験活動の効果：青年の適応促進に向けて

研究課題名（英文）Effects of Nature Experiential Activities Considering Individual Differences in Environmental Sensitivity: Evidence for Promoting Adjustment in Adolescents

研究代表者

矢野 康介（YANO, Kosuke）

独立行政法人国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター・青少年教育研究センター・研究員（移行）

研究者番号：30967568

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本課題では2件の縦断的調査を通じて、主に以下の知見が得られた。（1）青年が有する感受性の程度にかかわらず、1ヶ月あたりの自然体験活動の実施時間が長いほど、他者の情動を認識し、調整する能力やwell-beingが向上しやすい傾向がある。（2）1泊2日の自然体験活動において、感受性が中程度以上の青年では、自分の考えを他者に伝える体験の多さが、感受性の程度にかかわらず、何らかの物事に挑戦し、それを達成する体験の多さが、それぞれメンタルヘルスの向上と関連を有する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自然体験活動に関する先行研究では、その効果には個人差があり、必ずしもポジティブな効果が認められないことが指摘されている。本研究の知見は、このような効果の個人差が生じるメカニズムを明らかにするうえでの基礎資料となり得るため、学術的に大きな意義があると言える。また、青年における心理的・社会的な不適応の解決策の一つとして、自然体験活動が注目されている。本研究の知見を応用することで、より明確な目的意識を持った自然体験活動の計画が可能になることから、社会的にも一定以上の意義を有すると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This research project conducted two longitudinal surveys and reported the findings as follows. First, regardless of their level of sensitivity, the more time adolescents spend engaging in nature experiential activities per month, the more likely they are to improve their ability to recognize and regulate the emotions of others and their own well-being. Second, in two-day/one-night nature experiential activities, more experience in conveying one's thoughts to others was associated with better mental health in adolescents with higher than moderate sensitivity levels. Additionally, more experience in challenging and accomplishing tasks was associated with better mental health, regardless of the level of sensitivity.

研究分野：健康心理学

キーワード：環境感受性 感覚処理感受性 自然体験 メンタルヘルス 青年期

1. 研究開始当初の背景

文部科学省(2022)が実施した調査によれば、いじめ、暴力、自殺企図といった不適応行動を経験する青年の割合は増加傾向にあることが報告されており、早急な改善策の確立が求められる。このような行動面、およびその基盤となり得る心理面の不適応状態を防止し、良好な発達を促進するための取り組みの一つとして、自然体験活動に関心が向けられている(文部科学省, 2023)。自然体験活動は、都市緑地などの日常的に身を置く場所で行われるもの(e.g., 昆虫採集、夕日鑑賞)と、居住環境からは離れた環境で行われるもの(e.g., 登山、キャンプ、海水浴)に大別することができる。多くの先行研究では、いずれの環境で実施される活動でも、様々な適応指標に対してポジティブな効果をもたらすことを示している(e.g., Roberts et al., 2020)。その一方で、自然体験活動の効果の大きさには個人差があり、逆に不適応感が増大する事例も報告されている(Bratman et al., 2019)。この一因として、パーソナリティなどの特徴が異なる個人に対して画一的なプログラムを実施してきたことが指摘できる。

自然体験活動のような教育的介入の効果を調整する要因として、近年の心理学領域では、環境感受性の枠組みに注目が集まっている。環境感受性(以下、「感受性」と略記)とは、内的・外的情報の知覚および処理の個人差を説明する特性であり、肯定的・否定的感情反応の大きさ、微細な刺激に対する意識の高さといった特徴を反映する(Greven et al., 2019; Pluess, 2015)。青年の心理的側面に対する介入を行った感受性研究を概観すると、感受性が低い青年で大きな効果が観察された例と(雨宮・坂入, 2018)、対照的に、感受性が高い青年においてのみ有意な効果が認められた例(e.g., Amemiya et al., 2020)が混在している。この点を踏まえた基礎的な検討より、青年の適応が促進されるメカニズムは、感受性の程度に応じて異なることが示唆されている(e.g., Yano et al., 2021; Yano & Oishi, 2023)。

以上の知見に鑑みると、感受性の個人差を考慮したうえで、自然体験活動と種々の適応指標との関連を明らかにすることで、対象者の心理的特徴に合わせた安全かつ効果的な野外教育の展開、ひいては青年における心理社会的不適応の改善に資する示唆を提供できる可能性がある。

2. 研究の目的

上記の背景より、本研究課題では、自然体験活動の効果に個人差が生じるメカニズムにおける感受性の役割を明らかにすることで、青年の適応をより効果的に促進するための基礎的知見を提供することを目的とした。具体的には、以下に示す2つの目的を設定した。

目的1: 日常的に身を置く環境で実施されるものを中心とした自然体験活動の実施状況に注目し、様々な適応指標との関連における感受性の調整効果を明らかにする。

目的2: 日常的な環境からは離れた場で行われる野外教育実習での体験内容に注目し、活動を通じた適応指標の変化、および活動後の適応指標に関連を持つ要因について、感受性の個人差を踏まえたうえで明らかにする。

3. 研究の方法

本研究課題の2つの目的に対応した、2件の縦断的調査を実施した(以下、それぞれを研究1、2とする)。いずれの研究においても、報告者の所属機関に設置された研究倫理審査委員会より、事前に承認を受けた。

(1) 研究1: 自然体験活動の実施状況と適応指標との関連

調査対象者と手続き

中高生1,400名を対象に、各3ヶ月の間隔を空けた4時点の縦断的質問紙調査を実施した。調査対象者には、事前に調査の趣旨やデータの取り扱いについて文書で説明し、同意を得たうえで回答を依頼した。また、保護者向けの説明文書も配布し、必要に応じて同意撤回の手続きを行えるように留意した。その結果、1回目の調査には、1,212名(男子882名、女子314名、その他・不明16名; 平均年齢 15.5 ± 1.5 歳)、2回目には1,232名(男子784名、女子306名、その他・不明142名)、3回目には1,246名(男子883名、女子322名、その他・不明41名)、4回目は1,204名(男子865名、女子322名、その他・不明17名)が参加した。

なお、以下の測定項目ごとに、Directed Questions Scaleを挿入し、一定以上の違反回数(Maniaci & Rogge, 2014)を示した対象者は、その測定時点での回答をすべて欠損値として扱った。

測定項目

調査対象者には、1回目の調査で、感受性の測定尺度であるHSCS-A(岐部・平野, 2019)への回答を求めた(Cronbach's $\alpha = .69$)。また、すべての調査において、1ヶ月あたりの自然体験活動の実施時間(Preuß et al., 2019)を尋ねる項目に加え、青年の適応に関する指標である3つの心理尺度を使用した。すなわち、well-beingの測定尺度であるWHO-5-J(Awata et al., 2007; $\alpha = .82$ to $.88$)、情動知能の測定尺度である情動知能尺度(野崎, 2012)、レジリエンスの測定尺度である二次元レジリエンス尺度(平野, 2010)の3つであった。なお、情動知能尺度は自身の情動認識や調整に係わる「自己領域」($\alpha = .77$ to $.85$)、他者の情動認識や調整に係わる「他者

領域」($\alpha = .87$ to $.91$)、二次元レジリエンス尺度は遺伝的要因との関連が強い「資質的要因」($\alpha = .85$ to $.88$)、遺伝的要因との関連が比較的弱い「獲得的要因」($\alpha = .79$ to $.82$)といった下位尺度ごとに分析に用いた。

分析方法

第一に、単変量潜在成長モデルにより、自然体験活動の実施時間、well-being、情動知能の自己領域と他者領域、レジリエンスの資質的要因と獲得的要因のそれぞれにおける変化について、その個人差も踏まえた分析を実施した。第二に、自然体験活動の実施時間における切片と傾き、感受性(および両者の交互作用項)それに性別と学年を説明変数、well-being、情動知能の他者領域、自己領域、レジリエンスの資質的要因、獲得的要因のいずれかの切片および傾きを目的変数とした、多変量潜在成長モデルに基づく分析を実施した。

(2) 研究2：短期宿泊型自然体験活動を通じた適応指標の変化に対する関連要因

本研究課題の計画段階では、研究2では高校生を対象とした野外教育実習で調査を実施する予定であった。しかしながら、新型コロナウイルス感染症拡大の影響、ならびに協力予定機関の事情により、断念することとなった。その代替的な措置として、国立青少年教育振興機構(2021)が保有するデータセットを用いて、二次的な分析を実施した。

調査対象者と手続き

四国・北陸地方の青少年教育施設で実施された、1泊2日の野外教育実習の参加者である小学5年生～中学1年生393名を対象に、3時点(活動直前、活動直後、活動1ヶ月後)の縦断的質問紙調査を実施した。研究1と同様に、調査対象者には、事前に調査の趣旨やデータの取り扱いについて文書で説明し、同意を得たうえで回答を依頼した。また、保護者向けの説明文書も配布し、必要に応じて同意撤回の手続きを行えるように留意した。各調査時点にて、Directed Questions Scale (Maniaci & Rogge, 2014)を用いた回答態度のスクリーニングを行った結果、1回目(活動直前)の調査では363名(男子189名、女子171名、その他・不明3名;平均年齢 11.7 ± 1.0 歳)、2回目(活動直後)は368名(男子189名、女子169名、その他・不明10名)、3回目(活動1ヶ月後)は362名(男子188名、女子168名、その他・不明6名)の回答が、それぞれ有効データとして扱われた。

測定項目

調査対象者には、1回目の調査で、感受性の測定尺度であるHSCS-C(岐部・平野, 2020; Cronbach's $\alpha = .64$)に、2回目の調査で、野外教育実習における体験内容の測定尺度であるIOCE-C(西田ほか, 2002)に、それぞれ回答を求めた。IOCE-Cは、集団で行うキャンプ活動における自然との触れ合い、挑戦・達成、他者協力、自己開示、自己注目といった内容について、どの程度の頻度で体験したのかを測定する尺度である($\alpha = .68$ to $.79$)。また、すべての調査において、メンタルヘルスの測定尺度であるMHPC(西田ほか, 2003)を使用した。なお、本研究では回答に要する負担を考慮し、半数の対象者がMHPCの中でもネガティブな側面を反映する因子(怒り感情、疲労、引きこもり; $\alpha = .89$ to $.92$)に、残りの半数がポジティブな側面を反映する因子(生活の満足感、目標・挑戦、自信; $\alpha = .88$ to $.92$)にそれぞれ回答した。

分析方法

第一に、単変量潜在成長モデルにより、メンタルヘルスのネガティブな側面、およびポジティブな側面における変化について、その個人差も踏まえた分析を実施した。第二に、条件付き潜在成長モデルにより、調査時点を通じたメンタルヘルス(分析には、ネガティブな側面、ポジティブな側面のいずれかを投入)の変化や、3回目調査時点のメンタルヘルスに関連する要因を検討した。具体的には、メンタルヘルスの切片(3回目調査時点の値を反映)と傾きを目的変数、野外教育実習における5つの体験内容、感受性(および両者の交互作用項)、それに性別と学年を説明変数とし、分析を実施した。

4. 研究成果

(1) 研究1から得られた知見

単変量潜在成長モデルによる分析を行ったところ、自然体験の実施時間、well-being、情動知能の自己領域、レジリエンスの資質的要因、獲得的要因において、切片および傾きの平均値と分散が、いずれも有意な値を示した($p < .05$)。情動知能の他者領域では、切片の平均値、傾きの平均値と分散が有意な値を示した($p < .01$)。なお、いずれのモデルにおいても、適合指標は良好な値であることが確認された(CFI $> .91$ 、RMSEA $< .04$)。

多変量潜在成長モデルによる分析を行ったところ、自然体験の実施時間における傾きがwell-beingの傾きと($\beta = .15, p < .10$)、自然体験の実施時間における切片が情動知能(他者領域)の傾きと($\beta = .08, p < .10$)それぞれ有意な正の関連を示す傾向が認められた(図1)。なお、自然体験の実施時間における切片および傾きと感受性との交互作用項を投入したモデルでは、各適合指標が許容できる値を示さなかった。

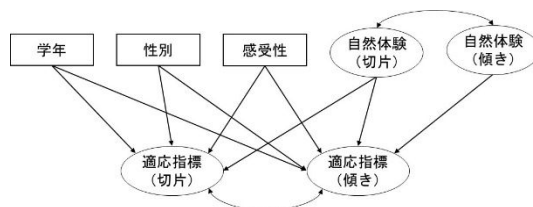


図1. 研究1における分析モデル

注) 適応指標には、well-being、情動知能の自己領域、他者領域、レジリエンスの資質的要因、獲得的要因のいずれかが該当する。

以上より、青年が有する感受性の程度にかかわらず、都市緑地のような身近な環境であっても、自然の中で過ごす時間を確保することが、well-beingの向上や、他者の情動に対する認識および調整に関する能力の向上に対して関連を持つ可能性が示された。

(2) 研究2から得られた知見

単変量潜在成長モデルによる分析を行ったところ、メンタルヘルスのネガティブな側面、ポジティブな側面のそれぞれにおいて、切片(3回目調査時点の値を反映)の平均値と分散、および傾きの平均値が、有意な値を示した($p < .01$)。なお、いずれのモデルにおいても、適合指標は良好な値であることが確認された(CFI $> .98$ 、RMSEA $< .05$)。

条件付き潜在成長モデルによる分析を行ったところ、メンタルヘルスのポジティブな側面における切片に対して、野外教育実習の体験内容の一つである挑戦・達成が、有意な正の関連を示した($\beta = .29, p < .01$)。同様に、感受性と自己開示との交互作用項が有意な正の関連を示したため($\beta = .39, p < .001$)、単純傾斜の検定を行った。その結果、感受性が一定以上の値($M - 0.38$)を示す場合のみ、両者の間に有意な正の関連が認められた(図2)。

以上より、学校行事として実施される野外教育実習のような、1泊2日の自然体験活動においては、何らかの物事に挑戦し、それを達成する体験が、活動1ヶ月後におけるメンタルヘルスの高さに関連することが示唆された。加えて、感受性が高いほど、自分の考えを他者に伝える体験と、活動1ヶ月後におけるメンタルヘルスの高さとの関連が強くなる傾向が示された。これらの知見は、自然体験活動の効果に個人差が生じるメカニズムを明らかにするうえで、有益な情報となり得る。

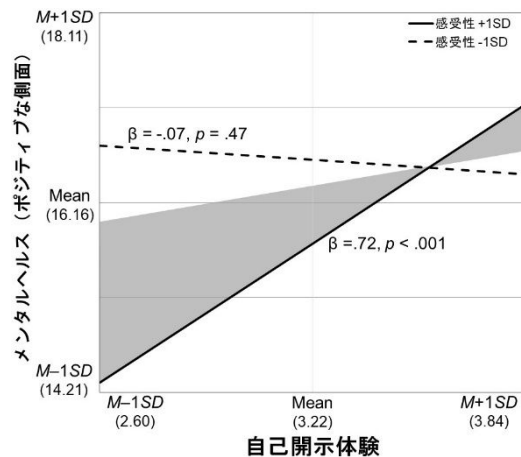


図2. メンタルヘルスに対する自己開示体験の単純傾斜(注)感受性の得点が $M - 0.38$ 以上(グレーの範囲)において、自己開示体験がメンタルヘルス(ポジティブな側面)の切片と有意な正の関連を示す。

(3) 得られた成果の位置づけと今後の展望

「1. 研究開始当初の背景」にて述べた通り、自然体験活動の効果において個人差が生じるメカニズムを明らかにすることは、安全かつ効果的な活動の実現に向けて、重要な課題である。また、感受性研究の文脈においても、特に国外では自然環境への関心が高まりつつある。例えば、感受性と自然環境に対する意識との関連(Holzer et al., 2024; Setti et al., 2022)、自然環境に関する映像視聴を通じた感情の変化における感受性の調整効果(Cadogan et al., 2023)などについて検討されているが、実際の自然体験活動に注目した例は見受けられない。本研究課題、特に研究2で得られた知見は、野外教育および感受性研究といった両領域の課題に対する示唆を提供し、その発展に寄与するものであると考えられる。

本研究課題では、上記のような知見を呈示することができた一方で、いくつかの課題が認められる。第一に、研究1では1ヶ月あたりの実施時間という、自然体験活動の量的側面のみを測定したが、研究2のように「どのような活動をするのか」という質的な側面にも注目する必要があると考えられる。今後は、質問紙を用いた基礎的な検討においても、実施時間に加えて活動内容や体験内容について測定を行うことで、日常的に身を置く環境での自然体験活動の効果、およびその効果に対する感受性の調整的な役割をより精緻に検討できるものと考えられる。

第二に、研究2では1泊2日の短期的な自然体験活動に注目したが、日本の中等教育機関では2泊以上の日程で野外教育実習を行う例も少なくない。そのため、より長期的な活動の効果検証を行うことで、実践の現場への適用可能性が高い知見を提供することが期待される。

参考文献

- Amemiya, R., Takahashi, G., Rakwal, R., Kahata, M., Isono, K., & Sakairi, Y. (2020). Effects of yoga in a physical education course on attention control and mental health among graduate students with high sensory processing sensitivity. *Cogent Psychology*, 7(1), 1778895.
- 雨宮 伶・坂入 洋右 (2018). 一過性の運動実践が敏感な個人の気分を与える影響についての試験的検証 パーソナリティ研究, 27(1), 83-86.
- Awata, S., Bech, P., Yoshida, S., Hirai, M., Suzuki, S., Yamashita, M., Ohara, A., Hinokio, Y., Matsuoka, H., & Oka, Y. (2007). Reliability and validity of the Japanese version of the World Health Organization-Five Well-Being Index in the context of detecting depression in diabetic patients. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 61(1), 112-119.
- Bratman, G. N., Anderson, C. B., Berman, M. G., Cochran, B., De Vries, S., Flanders, J., Folke, C., Frumkin, H., Gross, J. J., Hartig, T., Kahn, P. H., Jr, Kuo, M., Lawler, J. J., Levin, P. S., Lindahl, T., Meyer-Lindenberg, A., Mitchell, R., Ouyang, Z., Roe, J., ... Daily, G. C. (2019). Nature and mental health: An ecosystem service perspective. *Science Advances*, 5, eaax0903.

- Cadogan, E., Lionetti, F., Murphy, M., & Setti, A. (2023). Watching a video of nature reduces negative affect and rumination, while positive affect is determined by the level of sensory processing sensitivity. *Journal of Environmental Psychology*, 90, 102031.
- Greven, C. U., Lionetti, F., Booth, C., Aron, E. N., Fox, E., Schendan, H. E., Pluess, M., Bruining, H., Acevedo, B., Bijttebier, P., & Homburg, J. (2019). Sensory processing sensitivity in the context of environmental sensitivity: A critical review and development of research agenda. *Neuroscience and Biobehavioral Reviews*, 98, 287–305.
- 平野真理 (2010). レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み：二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の作成 パーソナリティ研究, 19(2), 94–106.
- Holzer, J. M., Dale, G., & Baird, J. (2024). People with sensory processing sensitivity connect strongly to nature across five dimensions. *Sustainability: Science, Practice, and Policy*, 20(1), 2341493.
- 岐部智恵子・平野真理 (2019). 日本語版青年前期用感性尺度 (HSCS-A) の作成 パーソナリティ研究, 28(2), 108–118.
- 岐部智恵子・平野真理 (2020). 日本語版児童期用感性尺度 (HSCS-C) の作成 パーソナリティ研究, 29(1), 8–10.
- 国立青少年教育振興機構 (2021). 国立青少年教育施設における小・中学校の集団宿泊の行事に関する調査：コロナ禍における安心安全に配慮した体験活動の在り方 <https://koueki.net/user/niye/110356631-2.pdf> (2024年6月17日閲覧)
- Maniaci, M. R., & Rogge, R. D. (2014). Caring about carelessness: Participant inattention and its effects on research. *Journal of Research in Personality*, 48(1), 61–83.
- 文部科学省 (2022). 令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について
- 文部科学省 (2023). 体験活動推進特設ページ (たっぷり体験) https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/ikusei/mext_00935.html (2024年6月17日閲覧)
- 西田順一・橋本公雄・柳敏晴 (2002). 児童用組織キャンプ体験評価尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 野外教育研究, 6(1), 49–61.
- 西田順一・橋本公雄・徳永幹雄 (2003). 児童用精神的健康パターン診断検査の作成とその妥当性の検討 健康科学, 25, 55–65.
- 野崎優樹 (2012). 自己領域と他者領域の区分に基づいたレジリエンス及びストレス経験からの成長と情動知能の関連 パーソナリティ研究, 20(3), 179–192.
- Pluess, M. (2015). Individual differences in environmental sensitivity. *Child Development Perspectives*, 9, 138–143.
- Preuß, M., Nieuwenhuijsen, M., Marquez, S., Cirach, M., Dadvand, P., Triguero-Mas, M., Gidlow, C., Grazuleviciene, R., Kruize, H., & Zijlema, W. (2019). Low childhood nature exposure is associated with worse mental health in adulthood. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 16(10), 1809.
- Roberts, A., Hinds, J., & Camic, P. M. (2020). Nature activities and wellbeing in children and young people: A systematic literature review. *Journal of Adventure Education and Outdoor Learning*, 20, 298–318.
- Setti, A., Lionetti, F., Kagari, R., Motherway, L., & Pluess, M. (2022). The temperament trait of Environmental Sensitivity is associated with connectedness to nature and affinity to animals. *Heliyon*, 8, e09861.
- Yano, K., Endo, S., Kimura, S., & Oishi, K. (2021). Effective coping strategies employed by university students in three sensitivity groups: A quantitative text analysis. *Cogent Psychology*, 8(1), 1988193.
- Yano, K., & Oishi, K. (2024). Individual differences in environmental sensitivity: associations between cognitive emotion regulation and mental health. *Frontiers in Psychology*, 15, 1322544.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 遠藤伸太郎、矢野康介、大石和男	4. 巻 67
2. 論文標題 COVID-19蔓延下における小学生の自然体験活動がメンタルヘルスに及ぼす影響：日常生活における運動時間を考慮した検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 体育学研究	6. 最初と最後の頁 657-672
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5432/jjpehss.21134	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 廣野正子、矢野康介、遠藤伸太郎、大石和男	4. 巻 -
2. 論文標題 介護職員の良い人間関係に関連する要因の抽出 地域での安定的職業に向けた質的検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 地域福祉研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yano, K., & Oishi, K.	4. 巻 42
2. 論文標題 Replication of the three sensitivity groups and investigation of their characteristics in Japanese samples	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Current Psychology	6. 最初と最後の頁 1371-1380
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s12144-021-01537-6	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Iimura, S., Yano, K., & Ishii, Y.	4. 巻 105
2. 論文標題 Environmental Sensitivity in adults: Psychometric properties of the Japanese version of the Highly Sensitive Person Scale 10-item version	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Personality Assessment	6. 最初と最後の頁 87-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/00223891.2022.2047988	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢野康介	4. 巻 11
2. 論文標題 大学生におけるライフスキルとメンタルヘルスの関連 感覚処理感受性の個人差を踏まえた縦断的検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 青少年教育研究センター紀要	6. 最初と最後の頁 90-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yano, K., Endo, S., & Oishi, K.	4. 巻 -
2. 論文標題 Benefits of an organized camp: Interactive effects of environmental sensitivity and experience content on mental health	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 PsyArxiv	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yano, K., & Oishi, K.	4. 巻 15
2. 論文標題 Individual differences in environmental sensitivity: Associations between cognitive emotion regulation and mental health	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2024.1322544	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 矢野康介	4. 巻 25
2. 論文標題 中高生スポーツ競技者における精神的健康の変化パターンと関連要因の検討	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 青森大学付属総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 36-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.57509/aomoriuniv.25.2_36	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 矢野康介	4. 巻 12
2. 論文標題 青年を対象としたウェルビーイング研究における環境感受性の役割 養育者のウェルビーイングに注目した検討	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 青少年教育研究センター紀要	6. 最初と最後の頁 70-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 廣野正子、矢野康介、遠藤伸太郎、大石和男
2. 発表標題 介護職員の良い人間関係に関連する要因の抽出 安定的職業継続に向けた質的研究
3. 学会等名 日本健康心理学会第35回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 矢野康介
2. 発表標題 青年のwell-beingに対する養育者のwell-beingの関連 環境感受性の個人差を踏まえた検討
3. 学会等名 日本心理学会第87回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yano, K., Endo, S., & Oishi, K.
2. 発表標題 Individual differences in sensory processing sensitivity: Associations of nature experience with feelings toward nature
3. 学会等名 16th International Congress of Physiological Anthropology (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西田昂平、松長大祐、矢野康介、松山尚道
2. 発表標題 器械運動の授業における教育効果の検証 マット運動の採点活動に注目して
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 矢野康介
2. 発表標題 感覚処理感受性と競技パフォーマンスの自己評価との関連 中高生スポーツ選手を対象とした横断的検討
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 飯村周平、上野雄己、小塩真司、岐部智恵子、串崎真志、高橋亜希、平野真理、矢野康介	4. 発行年 2024年
2. 出版社 花伝社	5. 総ページ数 187
3. 書名 HSP研究への招待：発達、性格、臨床心理学の領域から	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------